

未来へ届け、私の音

滝川市立明苑中学校 中村怜那 3年

私はピアノを弾くことが大好きだ。その想いは今も変わっていない。三歳の頃、本格的にピアノを習い始めた。その時「ピアノを弾いてみたい」と言ったからだそうだ。練習は大変なことばかりだけど、曲が一通り弾けるようになった瞬間は、今でも嬉しくてたまらない。そして、その嬉しさがまた次のモチベーションにつながる。そんな練習の末、私は小学二年生の頃、コンクールで全国大会への切符を掴んだ。正直、当時は全国大会に出場できる喜びよりも、人生で初めての東京に行ける喜びの方が大きかったが、どちらも私の人生にとって貴重な学びとなった。私にとってそれほど大切な思い出が沢山あるピアノがもし、なくなったら。

中学一年生の時、私は交通事故に遭った。幸い大事には至らなかったが、通院のために出場予定だったコンクールや発表会に出られなくなった。私はそこから三ヶ月ピアノに触れることができなくなった。その間に、感じたことがただ一つあった。

「またピアノを弾きたい…。」

どうしようもないほど毎日考えていた。事故に遭う前はピアノの練習も少しはサボりたい、思うように弾くことができず、投げだしたいと思うこともあった。なのに、その時はとにかくピアノに触れたくてしょうがなかった。

私はその期間に、今までのピアノに対する想いを見つめ直してみた。練習の辛さやコンクールの厳しさなどに苦しむことも沢山あった。何度も泣いたこともあった。しかし、ピアノのことは全くと言っていいほど嫌いなんかではなかった。これからの未来も、当たり前のようにピアノを弾くつもりだった。練習をしていると時々、「自分は何のためにここまでしているのだろう」と思うことがある。しかし、気付いていないうちに、私はピアノの虜になっていた。だから、練習を決してやめなかったのだと、その時初めて気付いた。

今、私は二本の分かれ道の前に立っている。ピアノを続けながら地元の高校に進学するか、それとも、毎日時間に追われながらも市外の高校に進学するか。まだ答えは決まっていない。しかし、私はどちらの選択肢を選んだとしても、ピアノは弾き続けたい。この熱い想いを未来へ繋げたい。繊細で透き通ったあのピアノの音を遠くの私へ届けたい。まだこれからどうなるのかは正直わからない。しかし、この音がいつかの私を勇気付けられるよう、私は願っている。